

あの男

Story By: Makoto NEKOYA

地上車が止まったのは目を閉していても直ぐに分かった。
「着いたわよ」

女の声に促されるまで目を開かなかったのは、時間が欲しかったからだ。ほんの僅か甘めて動悸が静まるまで、いえ、息が整つまで……そうじゃない、急に熱くなってきた頬がもとに戻るまで。

そう思いついて、思ったとに気づいた時、一瞬、目が眩んだ。

怒り——そう、怒り。自分が、そんな時を必要としたと人の怒り。

「どつしたの？ その気になわれないのなら」「これから引き返してもいいのよ。お尋ね者が堂々と顔をさらして歩けるのは今だけだから」

「お尋ね者ですって!!」

「冗談ではない。お尋ね者はあの男ではないか——」?

成り上がり者の金髪の孺子の、あるところからそのまた腰巾着を殺したなどと、ありもしない罪を問うて、大伯父リヒテンラーデ公爵の私邸に土足で踏み込んだのはあの男だった。

流刑惑星への終身流刑に処されたわたしたちに、その宣告を伝えたのもあの男。左右の腫に異なる光を湛えた、あの男だった。

絶対に、絶対に絶対に許さない。すべてを覆し、わたしたちから何もかもを奪い去った、あの男を。

こんな所では死なない。こんなところまで一生を終わらぬつもりなんかな

い。わたしただけがこんなところで死に絶えて、あの男が栄爵の中で
のつとで生き延びているなんて、絶対に許せはしない。

「わたしを誰だと思っているの。帝都へ帰るわ」から出しなさい!!」

何度、そつちで刑務官たちのオノイスに怒鳴り込もうとしたと
か。

大伯父の威光につらつて、わたしの前では頭もろくに上げられな
かた小役人たちが、皇帝陛下の代理人面でわたしを門前払する。
怒鳴っても脅しても、大伯父の名を出しても、彼らの顔に一度貼りつ
いたせうは笑いは消えなかつた。

「ローエングラム公の暗殺を企んだ一族の長の名前を振りかざされ
もねえ」

「ローエングラム公は厳しい方だからな。国事犯の一族に便宜を図る
なんてできるわけやない。生命を助けてもらうだけでもめつけないだ
と思ひな。分かつたらさうと帰つた、帰つた」

それが一年も続いた頃は、皇帝陛下の恩赦もなく、流刑惑星が
ら脱出することの難しさが、わたしにも嫌と言つぱらに分かつてきた。

「ローエングラム公は公正な方だぞうだから、その内に恩赦があつて」
から出られるかも知れないわよ」

そのころは、親族の多くがそつち言つよつちになっていた。

「何を言っているのよ!!」

都度、わたしは反発した。ローエングラム公……あの金髪の孺子が
公正? 恩赦ですつて?

「金髪の孺子が公正なら、どつちで大伯父様を殺したの? どつちで、

わたしたちをこんな所へ流したりしたといつて? どつちで、お父さまや、
伯父様たちを皆殺しにできたて言つてのよ。そんな奴がわたしたちの
ことなんて覚えてるなんて、どつちで思えるの!! とくの前を忘れて
しまつてゐるわよ」

金髪の孺子、金髪の孺子、金髪の孺子。きつと報いにくれてやるわ
きと大伯父様やみんなの仇をとてやる!!

叫び続けるわたしを、最初の内、みんなはとにかく黙らせようとし
た。金髪の孺子、ライバルトフォンローエングラムをそつ罵るだけで
さうに罪に問われかねない——そう恐れてのことだだけれど、そ
うして止められるたびに、彼らの顔に浮かんだ表情がわたしを更に激
昂させた。まるで奴隷、皇帝陛下の藩屏たる大貴族の誇りの影もな
い。ひたすらあの孺子を恐れるだけの、卑屈で希望のかげらも残つて
いない、その卑屈さがたまらなく嫌だつた。

「黙らなさいわ。わたしは何も罪を犯してない。罪を犯したのは、あの孺
子だもの、あの孺子とあの男なのだから!!」

あの男——そつち、金髪の孺子と罵る時、わたしの視野に浮かん
でくるのは金髪のこの世の者とも思われないうちに整つた美貌ではな
かつた。代わりに脳裏一杯に浮かび上がってくるのは青い灼熱と凍つ
いた黒。あざ笑つ青と、刺し貫く黒の輝きたつた。

「そつちよ、あいつよ、あいつがすべてをひっくり返した。すべてを壊したのだ
わ」

今にして思ふ。わたしは金髪の孺子を直に見たことがなかつた。眼
前に現れ、わたしに破滅を告げたのがあの男だつたからだ。

だがそんなとはどうでもよかった。いずれにしてもあの男は金髪の孺子の部下。それも、最初に孺子に付いた、皇帝陛下への裏切り者なのだから。

二年近くが過ぎたある日のことだ。

いつものように金髪の孺子!!と怒鳴った瞬間だった。

わたしはいきなり殴り倒された。

頭が叩き割られるほどの容赦のない一撃。地面に叩き付けられたわたしの背に、衛兵のつま先が食い込んだ。食事とも言えはばに貧しい食事を収めたばかりの胃の腑がひっくり返り、嘔吐が口を衝いて迸り出た。

「黙れ、大逆の罪に問われたのか!」

居丈高な怒声が落ちてきた。

「大逆ですって!」

「そつだ。その罵声を以て、畏れ多くも皇帝陛下を罵り奉るようなことが二度あれば、死を以て報いられるだろう。よく覚えておけ」

「皇帝陛下? 皇帝陛下とは誰のことよ。わたしはリヒテンフリーデム卿の一族よ。リヒテンフリーデム卿の一族ともある者が皇帝陛下を罵じらするわけがないわ」

「ではその口を閉じていろ。身のためだ。陛下を二度とそんな言葉で呼んだらすぐに撃ち殺す」

「わたしが呼んだのは、あの下賤な成り上がり者のことよ。皇帝陛下のふつと……」

言いかけて察した。そうなのだ。あの下賤な、成り上がり者の野心家はとつとつ本性を剥き出したのだ。皇帝陛下を玉座から逐い奉り、わたしたち一族の血で汚れた手で帝冠を自ら戴いたのだということに。

「許さない」

そうなのだ。大伯父様が本当にあの孺子を殺そうとされたかどうかなんて、もつ問題じゃない。あの孺子こそが大逆の犯罪者なのだから。大逆の罪人を除くのは貴族にとつての神聖で崇高な義務。それを罪に問った時、金髪の孺子はすでに篡奪者の本性を顕していたのだから。

「絶対に許すものか!!」

だけれどこの時でさえ、わたしが憎悪の対象として心の中一杯に思い浮かべていたその面影は……鋭く野心に輝く青い光と、何もかも冷ややかに見下すかのような漆黒の闇だった。わたしにとって、その男の名はローエングラム王朝への憎悪そのものの代名詞となっていたのだ。

「ローエングラム公が即位された以上、きつと恩赦があるよ」

ラインハルトフォンローエングラム戴冠のユースが伝わりと直ぐ、みんなはささく空しい希望を囁きに変え始めた。

あるわけがない。

あの男はただ玉座、皇帝の地位だけが目当ての獣。わたしたちはその獣に食い殺された獲物なのだ。獣が獲物を覚えているはずはない、まして情けなどかけるような心をもっているはずもない。